

# 再生、ものづくり文化の道 ~名古屋市西区~

山崎 崇

名古屋市西区には、名古屋が誇るべき様々な地域資源が集中している。「ものづくり文化の道」と名づけられたそのエリアで企業や企業博物館、伝統工芸の職人、商店街、市民団体、大学など様々な主体がまちづくりの活動をしてきた。人々が歩いて回遊できる「ものづくり文化の道」となるためのいくつかの取り組みを紹介したい。



多目的スペース「自由空間 藁の樓(わらのすみか)」土と藁を用いて空き店舗を改修された多目的スペース。地元の商店主、大学、まちづくりコンサルタントなどで構成される「藁の樓運営協議会」によって管理運営が協議されている。

「ものづくり文化の道」と都市再生  
 名古屋城の西、名古屋駅の北には名古屋が誇るべき様々な地域資源が集中している。名古屋扇子や名古屋友禅といった伝統工芸から菓子製造・卸などの近代産業、そして四間道や美濃路などの歴史的町並み、屋根神様、さらには産業技術記念館やノリタケの森等の産業観光の拠点となる企業博物館といったように列挙するには事欠かない。これらの地域資源は人々がそこで昔から「ものづくり」と密接に関係した生活を続けてきた証拠だとも言える。しかしながら、日本各地の都市と同様に伝統工芸や地場産業、商店街などの衰退や地域資源の減少が目立つようになってきた。

平成十二年度に地域の企業や企業博物館、伝統工芸の職人、商店街、市民団体、大学など様々な主体によって検討部会を組織化した。そして、このエリアを「ものづくり文化の道」として位置づけ、地域の活性化、地域全体の魅力向上や情報発信の強化のために様々な活動をしてきた。その結果、「ものづくり文化の館」、「ナゴヤシティ・ものづくりウォーク」などの各種イベントの開催、商店主や大学などによる多目的スペース「自由空間 藁の樓(わらのすみか)」の設置運営などの成果が数多くある。

**歩行支援と自転車**  
 このエリアにおける大きな課題が来街者の移動手段の確保である。名古屋駅などの鉄道駅はエリアの周縁部に位置し、地域資源が位置するエリアは広く、数多くの地域資源を徒歩で回遊するのは難しい。そこで着目したのが自転車である。二つの取り組みを紹介したい。  
 ひとつは来街者の回遊性の向上が予想されるペロタクシーの運行実験である。ペロタクシーはドイツ生まれの自転車タ

そして、平成十七年度には検討部会を「ものづくり文化の道推進協議会」に改組し、これまでの検討内容を具体化していくため、全国都市再生モデル調査に応募し、採択された。

「(仮称)ガイド 名古屋ものづくり文化の道」協議会にとって最も重要なことは地域資源の掘り起こしを行い、回遊ルート提案も含めて「ものづくり文化の道」は何であるかという概念を明確化することであった。そのために、エリアや地域資源の歴史、みどころなどをメンバーが中心になって執筆し、ガイドブックとして整理することになった。完成したガイドブックはボランティアガイド育成のための教材として利用することも予定している。地域の人々が訪れた人をもてなすホスピタリティの向上を図るのである。また、このガイドブックによって市域を越えて全国にこのエリアを発信したいと考えている。そのため、市販された場合のことを考慮して、仮称ではあるがガイドブックのタイトルに「名古屋」という都市名を付加している。そして、できるだけ多くの執筆者を募ることで、「ものづくり文化の道」への愛着を深め、みんなの道としての意識を醸成することにもつながると考えている。

このガイドブックは市販可能なレベルの完成を目標にしており、一月に暫定版の作成、その後十七年度末まではブラッシュアップ作業を行う予定である。

継続的に運行するには待機・保管場所、広告スポンサーの確保といった課題はあるものの、休日に限らずれば利用者も多く、運行の可能性が実証できた。ゆっくりとした速さを活かして四間道などの町並み観光に利用する観光客の存在や乗車アンケートで料金を高いと回答する人が一人もいなかったことが印象的であった。もうひとつは自転車マップづくりの取り組みである。愛・地球博会場周辺の自転車マップを作成した市民・自転車フォラムの協力のもと、十一月二十七日(日)にワークショップを開催した。職

クシーで、昨年の愛・地球博の開催期間中は会場内や栄周辺で運行されていた。ペロタクシーの運営を行っているNPO環境共生都市推進協会の協力のもと、十一月二十三日(祝・水)から二十七日(日)の五日間、実験を行った。運行コースは待機場所であるノリタケの森を起点として、産業技術記念館、名古屋駅、円頓寺・四間道、浅間町方面の四つである。料金は通常運行を想定して設定した。

待機所であるノリタケの森に戻ってきたペロタクシー



四間道の町並み観光に利用されるペロタクシー

待機所であるノリタケの森に戻ってきたペロタクシー



アイコンカードのイメージ

人、円頓寺商店街の方、住民、学生などが参加し、三つのグループに分かれ自転車に乗って調査をした。その情報をもとに「ものづくり文化の道」をイメージさせる場所「道路施設が悪い」などの様々なアイコンカードとデジタルカメラで撮影した写真をつかってマップ原案を作成した。

「銭湯は自転車利用者にとっては魅力的な場所、歩道があっても段差があるので危険」と自転車ならでは意見や、徒歩でのワークショップよりも広域にわたる情報が短時間で得られたことが印象的であった。駐輪場や自転車道などハード的な整備が必要な部分は残されるものの、参加者の多くが感じた自転車で訪れて楽しいまちとしても発信していきたい。

「ものづくり文化の道」の今後  
 「ものづくり文化の道」には赤レンガの建物などまだまだ魅力的な地域資源が眠っており、更なる掘り起こしが重要である。また、名物ボランティアガイドと呼ばれるような魅力ある人材という新たな資源もこれから多く生まれていくことになるだろう。

「ガイド 名古屋ものづくり文化の道」を手にした人々が「ものづくり文化の道」を訪れ、徒歩での移動はもちろんのこと、ペロタクシーや自転車を使って、より楽しんで回遊できる日が来ることを夢見ている。